

討論論文 1

対人関係能力の低下が「社会」にもたらす影響

名古屋大学 吉 田 俊 和

1. 三島論文へのコメント

高親密性・高排他性という特徴を持ったインフォーマル集団では、「集団内いじめ」の起きる可能性が高く、小学校高学年女子のインフォーマル集団に多く見られるという視点は新鮮である。ただし、山中（1994）の関係性の初期分化現象は、大学新生を対象としたものであり、一定期間を経た後も初期の関係が継続しているということを実証したものとして考えるべきである。個別的な面接データでは、初期の関係を維持しながら、新たな関係も模索していることが示されている（山中、1998）。

新しい集団に入って自分の居場所を確保するために、友だち作りをあせる（山添、1995）という点では同じかもしれない。しかし、大学生は既存の関係を維持しながら新たな関係作りを開始する対人関係技能を持つが、小学校高学年では持っていない。加えて、女の子が持つ閉鎖性が、集団外メンバーとの新たな関係開始を困難にしている。「集団内いじめ」を生起させているのは年齢と性の要因が大きいと考えられる。

マイノリティー集団やアウトサイダー集団で、他集団からの脅威が高まると、不安を「集団内いじめ」で解消する図式は理解できる。同じ図式が、普通のクラス内の「仲良しグループ」で起きるとすれば、彼らを感じている漠然とした不安や不満を作り出しているものは何なのであろうか。その点、著者が指摘している誤帰属による「いじめの循環」は説得力を持っている。要するに、思春期から青年前期に至る児童・生徒たちも、ストレス社会に組み込まれていることに他ならない。小学校高学年の子どもが学校生活で感じるストレス要因として、「友だちに関する因子」が抽出されること（長根、1991）自体が不幸である。

ところで、「友だちを作る力」や「もめ事解決能力」を低下させている要因考察に異論はないが、「集団内いじめ」行動を減らすような教師側の取り組み方法について触れられていないのは残念である。閉鎖的なグループ間のクリークを増大させ、子ども同士の交流を活発化していくには、おそらくバズ学習やジグソー学習といった小集団学習法を取り入れていくことが有効であろう（吉田、1993）。

2. 諸井論文へのコメント

「ベルフレ」現象は、まさに若者の対人技能の低下を示す現象として興味深い。この春に放映されたNHK特集「ベル友」の映像は、見事にそれを映し出していた。男子高校生の例と20代のOLの例が別々に紹介されていく構成であり、とくに男子高校生の例が中心となっていた。彼は高校生になってから「ポケベル」を買ってもらい、ガールフレンドを見つけるためにそれを使用する。「ベル友」用の雑誌があり、それに記載されている情報の中から自分に「ふさわしい偏差値」の学校の子を選び、目標人数を設定し、10文字程度のメッセージを発信する。彼の1日はベル・メッセージの発信と解読を中心に動き始める。家の電話は商売のじゃまになるので、公衆電話でキーを打つのだが、その手つきが職人的（50音と数字の対応に熟練する）になっていく。とうとうある女の子と駅で待ち合わせの約束をするが、至近距離になっても声をかけて確認するのではなく、近くの公衆電話から相手のポケベルへメッセージを打つのである。やっと確認がとれて、公園のベンチらしきところへ2人で座っても会話が成立せず、その間にも彼のポケベルは鳴っている。一方、20代のOLは、相手の男性（特定）と絶対会わないし電話

もしない。会うとお互い夢が壊れるからというのが理由である。ひたすらキーを打って、短いメッセージを交換し合っている異性関係は、他人事ながら心配になる。

著者が指摘するように、異性との関係開始技能が乏しいものにとっては、ポケベルは都合のよい装置であり、表面的な関係への志向性の強い時代にふさわしい装置であることは事実であろう。ただ、彼らの行動を見ていると、ちょうど“巣の中のひな”が鳴き声をあげて（短いメッセージの発信）、親鳥がエサを与えてくれるのを待っている（相手が親密な関係をもたらしてくれる）姿とダブらせてしまったのは筆者だけであろうか。自分がエサ（異性との親密な関係）を獲得すべき年齢になっても、まだ「甘えた」関係から脱却できないでいる若者像である。

このことは、「充足遅延」能力の低下とも関係する。「援助交際」が「充足遅延」能力の低下の反映かどうかは疑問が残るが、親密な対人関係を形成していく上で、「充足遅延」能力は重要である。関係形成過程で、相手は即時強化的に報酬を与えてくれるわけではない。場合によっては、コストをかけても何も得られない事態さえ生じる。これは、体験してみなければわからないし、自ら努力したことによる成功体験が、その報酬を実際以上に大きく感じるができるものである。こうした能力は、対人関係以外の経験とも密接に関連する。

ところが、現代の若者の「充足遅延」能力は、親の偏った価値観により阻害されている。親が子供に期待する「充足遅延」能力は、受験勉強に関するものに限定されている。「有名中学に入るまでは、高校や大学に入学するまでは、とにかく我慢して勉強しなさい」なのである。そうすれば、「あとは好きなようにしていい」のである。「お小遣いを貯金して一番欲しいものを買う」という充足遅延行為も、「成績が上がったら買ってもらえる」にすり替わってしまう。しかも学校では、多くの教師がこのシステムに加担している。こうした環境下で育つ子どもたちに、「充足遅延」能力を期待するのは難しい。カード使用で手軽に高級ブランド品を身につけたり、ローンを組んで高級車に乗ったりして、自己破産に至る若者が急増しているのも、「充足遅延」能力の欠如が原因なのかもしれない。

3. 相川論文へのコメント

「対人関係能力」という概念を、「社会的知能」、「社会的コンピテンス」、「社会的スキル」といった心理学の学術用語を用いて定義されたことは、誌上シンポジウム全体の理解を助けるものとしてありがたい。

対人関係能力は低下しているのか？という問いを發し、三つの仮説を設定されているが、検証はできないものの多少の反論を試みたい。まず、人間関係に関する知識や認知的情報処理に関するコンピテンスの側面は、数十年前も現在も大差ないが、それを実行する際のスキルの側面に低下が見られるのではないかという第一の仮説である。著者は、スキルの側面の低下がもたらされた原因として、家庭・地域社会・学校の変貌を取り上げ、子どもたちが対人関係スキルを獲得したり、洗練したりするチャンスが極度に減少したことを指摘している。これは、子どもたちが人間関係に関する「体験的知識」を得る機会が減り、認知的情報処理機能を活性化させるチャンスも少なかったことを意味する。人間関係に関する知識は体験によって獲得されていくものであり、対人的葛藤の処理方法などはその典型例である。したがって、コンピテンスの側面が十分でなければ、効果的に行動するスキルの側面も発揮されにくい。いわば、両者は相互にフィードバックし合って向上していくものと考えられる。

第二の仮説は、集団全体の対人関係能力が低下したのではなく、正規分布していたものが、スキル面の能力の高い者と低い者とに二極化しているというものである。これに関しては、筆者は肯定も否定もできないが、低い方への偏りが多くなっているように思われる。

第三の仮説は、社会全体が、各人の高い対人関係能力を要求するようになってきたのではないかというものである。その原因として、規範や役割の拘束力が弱まり、各人が自分の判断で柔軟に対応しなければならなくなったこと、第三次産業従事者が増加し、彼らに高度な対人関係能力を要求するようになっ

たこと、が指摘されている。この指摘は的をえている。社会の価値観が多様化し、「かくあるべき」より、個人の判断が重要視されることに異論はない。問題は、中途半端な個人主義が浸透し、社会が新しいルールを確立できないでいることである。高い対人関係能力を要求する社会であれば、明確なルールを呈示し、子どもたちにそのルールを教えていくのが公教育の役割であろう。

その意味で、著者が提案する「社会的スキル集団教育」は、一つの解決策であり、筆者も大賛成である。ただし、行動的な側面のスキル訓練だけでなく、コンピテンスの側面を高めるような指導法（異学年交流や小集団学習などの体験）の導入も望まれる。

4. 「対社会」関係能力の低下

橋本(1996)は、大学生が感じる対人ストレスの中に「対人摩耗」の因子が存在することを見いだした。これは、社会的スキルを行使することに対し、気疲れを引き起こすというものである。では、彼らが仲間に対して気疲れするような社会的スキルを行使するように、親や教師にも気を遣っているかというところではない。大学教師の多くが不快にさせられることに、授業中の私語、ポケベルや携帯電話の受信音がある。さらに、キャンパス内に目を移すと、出入り口の近くに座り込んだり、自転車やバイクを平気で玄関前に止めようとする。注意をすると「関係ないだろ！」という顔をする。ところが、面識があったり、制裁をちらつかせると素直に応じる。要するに、自分に関係のある人間だけが彼らの「社会」であり、それ以外の人間には無関心なのである。その結果、他者に「社会的迷惑」をかけていることに鈍感である。彼らには、自分が「社会」の一員であり、自分以外の人間も同じ「社会」の一員であるという自覚が希薄なのである。

このことは、彼らが子どもの頃から家庭や学校に管理され続け、自分で本当の「社会」を体験していないことに起因する。学歴社会に適応するため、親は子供の生活を管理しようとする。子どもは服従の代償として、物質的な欲望を満たそうとする。自分の部屋に、テレビ・ラジカセ・ファミコン・ポケベルや携帯電話・種々のブランド品を揃えたがるというプライバシーの肥大化が生じ、変に大人びた子どもになってしまう。彼らは、時間を調整して友だち同士で遊ぶよりも、居心地のいい部屋で、テレビを見たり、マンガを読んだり、ファミコンに興じている方が気楽になっていく。友だちとのコミュニケーションは、ポケベルや携帯電話で済ませてしまう。こうした子どもたちは、友だち同士でぶつかり合って人間関係のルールを形成していくことは苦手であり、傷つきたくないで、友だちとの関係に深入りすることを避けようとする(吉田, 1995)。学校も、規則を守らせようとするだけで、なぜ規則が必要なのかを教えようとしなない。加えて、受験勉強は正答に到達するためのハウ・トゥー的な機械的ルールの習得が中心である。つまり、家庭や学校は、彼らを管理することには熱心でも、基本的な「対人関係」や「社会」のルールを教えていない。学力的知識の習得は、いくらでも後から補充できるが、「対人関係」や「社会」に関するルールは、精神発達に応じて習得させ、形成しなければならない。大人は、このことを肝に銘じておく必要があるだろう。

5. 公教育が果たすべき役割

では、学校教育で「対人関係」や「社会」のルールを教えるとしたら、どのようなものが考えられるであろう。相川氏が提唱する「社会的スキル集団教育」も有効な手段である。しかし、「社会」のルールを考えさせるには、少し物足りない。そこで、筆者がたまたま関わることになった、名古屋大学附属中・高等学校が取り組んでいる「総合人間科」の授業をヒントとして紹介してみたいと思う。

総合人間科とは「中等教育にあって、人間と自然、社会の関わりを従来の教科の枠を超えて追求し、脱偏差値、脱教科を柱とし、自己実現をめざす教科といえる。この教科を通して『なぜ学ぶのか』、『人類にとっての課題とは何か』といった、これからあるべき社会を考えることで従来の教科学習への環流を図っていくと同時に、自分の頭の中で総合的に物事を判断し、考えたことを自分の言葉で表現したり、

行動できるような人間を育てる教科をめざすもの（名古屋大学附属中・高等学校研究部，1995）」と定義される。年間テーマは各学年ごとに異なり，原則として，月2回土曜日の3・4時限に実施される。

筆者が今年度関わっている中学1年生では，「出会いから学ぶ—いろいろな世代のさまざまな生き方を探る—」がテーマである。1学期は，自分たちが現在考えたり悩んだりしていることを先輩にインタビューして，まとめることが課題である。グループに分かれ，インタビュー内容を話し合い，二人一組になって中3・高1・高3の生徒にアポイントメントをとり，昼休みや放課後に個別インタビューを行うのである。夏休み中に，その成果をまとめて，9月に発表会を行い，級友からフィードバックをもらう。この一連の授業の中で，生徒たちは「対人関係」や「社会」のルールを習得していくのである。グループで話し合い，協力してインタビューや発表資料の作成をする，発表に対し級友からフィードバック（感想）をしてもらうことは，「対人関係能力」を高める。先輩へのインタビューは，クラスや学年を超えた「学校社会」を知ることであり，自分たちの位置づけも理解でき，「対社会関係能力」を高める。ちなみに2学期は，自分の親や友だちの親へのインタビューが課題である。さらに，中2では環境，中3では国際社会がキーワードであり，資料収集や聞き取り調査なども学校外となり，自分たちと「社会」との関わりについて考えを深めていく。

また，本年度が3年目になる「総合人間科」の授業を見学していると，教師の力量によって，生徒の授業への取り組み方に顕著な差が出てくるようである。力量には，担当学年・担当教科・年齢・性別は関係がなく，おそらく担任教師がもつ「対人関係能力」や「対社会関係能力」の高さが関係していると考えられる。

「社会的スキル集団教育」や「総合人間科」のような教育を導入するに当たっての最大の問題は，教師側の問題である。教師の方に対人関係能力が十分に備わっていなければ，効果的な指導を行うことができない。その意味で，相川氏が主張する対人関係能力を重視した大学入試や人材採用が，もっとも必要なのは教師であろう。義務教育を担当する教師に求められるものは，単なる偏差値の高さではなく，豊かな対人関係能力である。そうした教師たちが，子どもたちに「対人関係」や「社会」のルールを教える教育こそが，これからの公教育が果たすべき役割だと考えられる。

文 献

- 橋本 剛 1996 対人ストレスイベントの種類を検討—併存的妥当性の観点から— 日本社会心理学学会第37回大会発表論文集 Pp. 64-65.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学校4，5，6年生を対象として— 教育心理学研究，39，182-185.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究，34，105-115.
- 山中一英 1998 大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究 社会心理学研究，13，（印刷中）.
- 山添 正 1995 子ども社会の「人づきあい」を考える 児童心理 4月号，Pp. 29-35.
- 吉田俊和 1993 子どもに人間関係を教える 児童心理 8月臨増号，Pp. 18-24.
- 吉田俊和 1995 子どもの仲間社会 梶田正巳（編）「成長への人間的関わり —心理・教育学的理解—」 有斐閣 Pp. 164-178.